

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 6 日現在

機関番号：32621

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2013

課題番号：24700662

研究課題名(和文) 年中行事が護る日本の伝統的スポーツ・身体文化研究

研究課題名(英文) The research on Japanese traditional sports and body culture which are protected by annual events

研究代表者

瀬戸 邦弘 (SETO, KUNIHIRO)

上智大学・文学部・講師

研究者番号：40434344

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円、(間接経費) 510,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、年中行事や祭りなどで行われる伝統的コンペティションの実践を通して日本人の伝統的な身体観、および伝承のあり方、変容過程を考察する事を目的とした。そもそも年中行事や祭りとは、近代以前の価値観が保持される空間であり、そこでの諸価値は日本の「伝統」文化として護られている。本研究では岡山市西大寺の会陽、岩手県黒石寺の蘇民祭という東西の「裸祭り」における伝統的コンペティション(寶木および蘇民袋の争奪戦)を中心に前近代から護られ、変容してきた価値の体系を、各地域の身体への「まなざし」を通して考察した。結果として地域文化とその価値を護るために伝統的競争空間が重要な役割を担っていることが確認された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to examine the Japanese traditional outlook on the body, its way of transmission and gradual changes through the practice of traditional competitions in annual events and festivals. Firstly, annual events and festivals are places where the sense of values from before the modern period are maintained and the values in that place are protected as Japanese "traditional" culture. In this research, the system of values which is protected and changed is examined through the "look" on the body in each district through the example of Hadaka-matsuri in the east and west side of Japan such as "Eyou" at Saidaiji Kan-nonin shrine Okayama prefecture and "Sominsai" at Kokuseki-ji shrine in Iwate prefecture. In conclusion, it is confirmed that the traditional place where competition is held takes an important role in protecting the local cultures and their values.

研究分野：複合領域

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学・スポーツ科学

キーワード：スポーツ文化人類学 スポーツ哲学 民俗学 文化人類学 身体論

1. 研究開始当初の背景

本研究では、年中行事や祭りなどで行われる伝統的コンペティションの実践を通して日本人の伝統的な身体観、およびその伝承のあり方、変容過程を考察する事を目的としている。そもそも年中行事や祭りとは、近代以前の価値観が比較的保持される空間であり、保持される諸所作は日本の「伝統」文化として護られている。本研究では岩手県黒石寺の蘇民祭、岡山県西大寺の会陽という東西の「裸祭り」における伝統的コンペティション（蘇民袋および寶木争奪戦）を中心に前近代から護られ、また変容してきた価値の体系を、各地域の身体への「まなざし」を通して考察するものである。

(1) 研究の学術的背景

本研究は年中行事や祭りなど、日本のいわゆる“伝統”的な文脈における「身体」のあり方・扱われ方に関して考察を行い、日本人が受け継いできた身体観を詳らかにしようとするものである。考察では特に伝統的コンペティションの実践に焦点が当てられスポーツ・身体文化を通し共有される地域文化としての身体を理解し、延いては日本文化における身体観の形成において伝統的スポーツ・身体文化が如何なる役割を果たしてきたのか、その理解を目指すものとなる。年中行事や祭りなどでは、日常生活の中ですでに失われた近代以前の感じ方や考え方が地域文化として継承されており注目される場所である。本研究では全国各地で行われる「裸祭り」を取り上げる。そもそも「裸祭り」とは参加者が裸体となり身体を清める事により清浄無垢さを手に入れ神仏との交渉が叶うという全国的に広く見られた行事であった。ところが現在では限られた事例のみ存続されるに留まり、それらは前近代的価値観を考察する場としては非常に重要なものである。たとえば、黒石寺では蘇民袋、西大寺では寶木（しんぎ）という事物に籠められた

「福」を求め、人々は激しい争奪戦を繰り広げるところとなるが、これら二例ではそれが行われる空間（フィールド）、決まり事（ルール）などが参加者たちに暗黙裡に共有されながら争奪戦が継承されており、その点、スポーツ史やスポーツ・身体文化研究の立場からは近代・国際スポーツのひとつの“原初形態”を考察する場としても興味深いところである。ところで、これらの行事は古来より一様な姿を保持しながら受け継がれてきたわけではない。たとえば、西大寺会陽では門前町の社会構造の変化に応じて、寶木争奪戦を含む祭りそのものにゆるやかな変容が認められる。また、蘇民祭では2008年の蘇民祭に際し作成されたPR用ポスターの表現が現代的価値基準とそぐわないという意見が出て全国的な注目を集めることになったことは記憶に新しい。申請者はこれまで自身の研究の中で常に「前近代と近代以降」の相克や文化変容の問題に直面し、その問題の重要性を痛感し、あわせて大いなる関心事として位置付けてきた。特に身体は社会における価値規範と直結するメディアであり興味深い。スポーツ・身体文化研究者である申請者は、特に伝統的なコンペティションを通して創出される身体観や身体技法に特に興味を持つところであり、これらにより抽出される地域延いては日本の身体を理解を目指すところとなっている。

2. 研究の目的

本研究では研究期間内にこれらの伝統行事の関係者が共有する地域独特の身体世界を、参与観察によって得られる言説ならびに身体観、および身体技法分析から明らかにする。あわせてそれらが地域コミュニティの紐帯としてどのような文化・社会的役割を果たしているかをも理解する事も重要な考察点となる。本研究では祝祭実施期間に実修者に共有・継承される暗黙裡の身体・身体技法の情報を収集し、地域文化としての身体を抽出

しその認識のあり方を言語化する事を目指す。あわせて、先行研究を加味しながら「日本文化」としての古来より共有されてきた「身体」を抽出することを試みる。

上記のように、本研究は社会におけるひとつの「伝統地域文化」としてスポーツ・身体文化を考察する立場をとる。ところで、伝統文化とは得てして共有される約束事が文字化されない場合が多く、本研究で取り上げる事例もその例外ではない。したがって、本研究は社会において言語化されず伝承される世界を研究するものともいえる。すなわち、本課題は西欧世界で育まれた科学に基づく近代的な身体観とは異なる暗黙の内に共有される地域の「身体へのまなざし」を分析し、従来より研究者が共有する西欧科学に依拠した身体理解と比較検討を可能な「日本の身体観」を抽出するともいえるだろう。ところで、伝統社会で人々が共有する認識は、いわゆるエスノサイエンスと呼ばれるものともなり、「暗黙知」として共有される。これら暗黙知を言語化して行くという営みは、西欧科学に依拠したスポーツ科学研究には見られない独自の視座ともいえ、スポーツ・身体科学研究分野に新たな知見を提供する可能性を大いに含むものと思われる。あわせて、本研究で扱われる伝統的身体観とは、日本社会の中心に存在するものとなり、本研究はスポーツ科学や身体論の中に位置するのと同時に「日本文化研究」の一端を担うものとなることを意味する。日本文化研究においても身体研究は常に焦眉の研究テーマであった。我々は「文化」という枠組みの中で日々生活を営んでいる。「社会」とはそれぞれ地域の持つ独自の価値体系の中に存在するが、そこでの価値基準とは西欧の科学に依拠しない認識・分析の尺度である“エスノサイエンス”によって形作られる部分が大きいのである。本研究課題に即した一例を挙げれば、日本ではそもそも明治期に「裸体禁止令」が施行さ

れるまで「裸」という存在は日常の姿のひとつであった。たとえば江戸期には公衆浴場で男女が混浴することは当然であり、また祭りにおける「裸」とは身を清め、生まれたままの清浄無垢な姿になる事を意味し、穢れたものを落とした純粋な姿を体現するものといえるのである。ところで、伝統的スポーツ・身体文化では伝統文化の特徴として挙げているようにルールなどの約束事が明文化されていない場合がほとんどであるが、本研究では実修者たちに共有されるこれら約束事やハビトゥスを、日本の「伝統的身体観」、「身体へのまなざし」として研究する事を目指すことにもなるのである。たとえば、伝統的コンペティションの参加者たちは地域に伝承される信仰対象と自身を繋げる独自の身体観を保持している。市川はその著「身体パフォーマンスの発生とストラクチャー」『表象としての身体』(市川雅、鷺田清一・野村雅一編 大修館書店 2005)の中で身振り、姿勢、行為などは表現としてコード化されていることを論じているが、本研究における行事参加者たちの身体理解は、まさに彼の言うコード化のひとつである。そして参加者のみならず当該コミュニティに属する人々によってもその身体観は共有され、地域文化としての「暗黙知」として共有される知の体系を形成しているのである。先程も述べたが、この伝統文化としての「暗黙知」を言語に載せて可視化することは、現在のスポーツ科学研究では焦眉の課題とはなっていない反面、有益な視点であることは間違いなく、本研究により齎される方法論や研究モデルは必ずや新たな研究視座を提供することになると考える。申請者はこれまでさまざまな国や地域でスポーツ・身体文化に関する研究を展開してきており、そこで得た「暗黙知・身体知」へのアプローチは本研究を支える重要な根幹となっている。申請者は、文化・スポーツ人類学的人類学的な参与観察を当該地域にて数

多く行っているが、あわせてスポーツの歴史的研究にも精通している。そのため共時的な文化研究のみならず通時的な研究視座をも含めて本課題の遂行にあたることが可能であり、歴史研究で培った通時的な思考も含む文化・スポーツ人類学的な視点から総合的に考察を試みるあり方は本研究の独創的な点のひとつといえよう。

3. 研究の方法

2年間に渡る研究において基本的に現地において祭事の参与観察（聞き取り調査、映像・画像）にて収集したデータのアーカイブ化を最重要課題のひとつと位置づけ、それらデータの分析、考察を展開している。また参与観察に際しては各地域の新聞等のメディア報道資料の収集にも力を傾注し地域のまなざしともいうべき資料の蓄積の収集、検討も重要な課題とする。また学術的先行研究の検討にも大いに力を注ぎ学術雑誌、および単行本として刊行されている論考の収集、検討を行い文化の動態として伝統的なスポーツ・身体文化の分析を注意深く進めた。

現地での参与観察では、現地の人々への聞き取り調査、およびビデオ、カメラによる映像・画像の記録を通して行われた。参与観察においては、各行事の開催時の調査・記録はもちろんの事として、行事の主催者、および参加者の準備等、また行事後の追跡調査も実施されており、日常的な実践の中での身体に関して注目された。また、参与観察によって得られる知見にあわせて文献研究により先行研究の成果をも踏まえて考察を練り上げられた。参与観察に際しては、IC録音機を用いたインタビュー音声記録を、またデジタルビデオ、デジタルカメラにて映像・画像の記録を行われ、参与観察と並行しながら保存データの確認作業を行う。帰京後は参考文献を渉猟し、当該地域、および日本の伝統的な身体・スポーツ文化を網羅的に考察し、先行

研究の蓄積を加味して日常および祝祭の世界での伝統的身体を考察している。また近代化以後の日本人の身体観を比較検討するための研究も実施され、たとえば、明治期から育まれる身体文化研究として「箱根駅伝」が、また外国から見る日本文化の表象例として「忍者」について、そして現代大学空間における身体の現在を理解するために「大学における身体知教育」に関しても研究が進められている。また他の文化圏の身体文化との比較も積極的に試みており、たとえば台湾における少数民族文化などの研究も行われており、これらの成果と比較検討しながら本研究の深化を試みている。

4. 研究成果

本研究では、年中行事や祭りなどで行われる伝統的コンペティションの実践を通して日本人の伝統的な身体観、および伝承のあり方、変容過程を考察する事を目的とした。先述したようにそもそも年中行事や祭りとは、近代以前の価値観が保持される空間であり、そこでの諸価値は日本の「伝統」文化として護られている。



寶木争奪戦の様子

本研究では岡山市西大寺の会陽、岩手県黒石寺の蘇民祭という東西の「裸祭り」における伝統的コンペティション（寶木および蘇民袋の争奪戦）を中心に前近代から護られ、変容してきた価値の体系を、各地域の身体への「まなざし」を通して考察したが、その結果

として地域文化とその価値を護るために伝統的スポーツ・身体空間が重要な役割を担っていることが確認された。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3件)

1. 瀬戸邦弘、「エスニック・スポーツとしての“箱根駅伝”」(単著)『文化人類学研究』第14巻 査読有 早稲田文化人類学会 pp.41-54 2014年
2. 瀬戸邦弘、「スポーツ人類学の現在」(共著)学会誌特集 瀬戸邦弘、寒川恒夫、小木曾航平、波照間永子の共著『文化人類学研究』第14巻 査読有 早稲田文化人類学会 pp.55-68 2014年
3. 瀬戸邦弘、「現代的イベントが生成する伝統的イメージ-伊賀上野 NINJA フェスタの事例研究から」『吉村作治先生古希記念論集』査読無 中央公論美術出版 pp.259-270 2013年

〔学会発表〕(計 3件)

1. 瀬戸邦弘、「スポーツ文化としての箱根駅伝」日本スポーツ人類学会第15回学会大会 2014年3月27日 開催地：東京学芸大学 日本スポーツ人類学会
2. 瀬戸邦弘、「大学におけるウエルネス教育の実践とその可能性 - 上智大学・全学共通科目『ウエルネスと身体』」日本ウエルネス学会第10回大会 2013年9月16日 開催地：明治大学 日本ウエルネス学会
3. 瀬戸邦弘、「台湾原住民布農族における民族スポーツの保護、変容と観光化 -2013 布農族運動会を事例として-」日本体育学会第64回大会スポーツ人類学専門領域 2013年8月30日 開催地：立命館大学 日本体育学会

〔図書〕(計 3件)

1. 瀬戸邦弘、「スポーツと人類学」p.36、「ブラインドウォーク」p.110、『身体のリベラルアーツ』(共著)、師岡文男、鈴木守、瀬戸邦弘他、総頁：184、上智大学保健体育研

究室 2014年

2. 瀬戸邦弘、「スポーツ・身体文化論-文化としてのスポーツから身体へのアプローチ」, pp.91-104、『「知としての身体を考える」上智式大学における身体知の再構築』(共著)、鈴木守、瀬戸邦弘他、総頁：225、学研マーケティング 2014年
3. 瀬戸邦弘、「大学応援団という空間とその身体」, pp.281-314、『近代日本の身体表象と文化』(共編)、瀬戸邦弘、杉山千鶴他、総頁：314 森話社 2013年

6. 研究組織

(1)研究代表者

瀬戸 邦弘 (SETO, Kunihiro)

上智大学・文学部・講師

研究者番号：40434344